

岡山醫學會雜誌第二百五十六號

大正八年九月三十日發行

原 著

黃熱ニ就テ（豫報）

於クサイ島

田 丸 要 槌

黃熱 Gelb Fieber, Yellow fever、熱帶地方ニ於テ惡寒發熱黃疸心窩痛嘔氣嘔吐殊ニ白色乃至黑色鮮紅色嘔吐尿量ノ減少乃至缺如灰黑色下利便等ヲ呈スル熱性傳染病ニシテ之ヲ文獻ニ徵スルニ嘗テハ西印度ヨリ發シ漸次北米合衆國、南米殊ニブラジル、ペルウ、亞弗利加ノ西海岸、葡國、西班牙近クハ比律賓ノ一部ヲ侵襲セシ歴史ヲ有シ「ステゴミア」屬ノ蚊ノ媒介ニヨリ傳播サル、モノ、如シ

原因

病毒ハ未ダ判明セザレドモ「ステゴミアカロープス」Stegomyia Calopus ガ本病毒ノ傳播ヲナスコトハ事實ニシテ「リード」Reed「カロール」Carroll「アグラモン」Agramonte 等ハ血液接種試驗ニヨリテ證明シ而モ其傳染力ハ發病後二三日内ニ於ケル初期ノ患者ノ血中ニ存スルモノニシテソレヨリ後期ノ患者ヨリ採取シタル血液ハ傳染性少ナキモノ、如シ而シテ本病ノ誘因トモ稱スベキモノハ身體ヲ雨中ニ曝露シモシクハ蚊帳ナクシテ海岸ニ坐睡シ或ハ感冒ニシテ土人又ハ永ク住居スルモノハ免疫モシクハ罹病スルモ極メテ輕症ニシテ他ヨリ移住者ハ土人ト雖侵襲セ

ラル、コトアリ人種學上ヨリ見レバ歐米人ハ最モ感受性強ク亞細亞人ハ之ニ次グ、之ヲ要スルニ高等人種ハ感受性
鋭敏ナルモノ、如シ

症候

突然惡寒戰慄ヲ以テ三十九度以上四十度ニ熱發シ脈搏一〇〇乃至一二〇ヲ算シ食欲缺損全身痛殊ニ咀嚼痛(患者
ハ常ニ嚙下痛トシテ訴フ)等ヲ發シ第二日ニ至リテハ既ニ黃疸ヲ發シソレヨリ各種ノ全身症狀ヲ發ス而シテ二三日
稽留ノ後俄然發汗ト共ニ分利シテ漸次輕快スルカモシクハ再度惡寒ヲ以テ發熱シ著明ナル黃疸皮膚搔痒皮下溢血肝
臟部腫脹過敏嘔氣嘔吐就中此嘔吐ハ初メハ普通ノ白色モシクハ膽汁ヲ混セル吐物ナルモ重症ノ場合ニハ暗黑色乃至
鮮紅色血性嘔吐ヲ發ス其他尿量ハ初期ヨリ大ニ減少シ甚シキハ無尿トナリ一週以上ニ亙ルコトアリ此尿ハ著明ナル
蛋白ノ反應及膽汁色素ヲ含ミ比重高ク反應ハ酸性又ハ「アルカリ」性ナリ便ハ灰黑色ニシテ黃疸便ニ特異ナル惡臭ヲ
呈シ常ニ下利性ナリ而シテ本症ニ特異ナルハ熱ト脈ノ伴ハザルコトニシテ脈ハ初メノ間ハ頻數ナルモ漸次減少シテ
六〇乃至ソレ以下ニ下降スルニ至ル(フアジエツト氏徵候)而シテ合併症トシテ最モ屢々淋巴腺炎ヲ發シ就中扁桃腺
腫脹耳下腺炎及從テ咀嚼困難(患者ハ常ニ嚙下困難トシテ訴フ)ヲ來スモノニシテ此最後ノ徵候ハ余ノ實驗ニヨレバ
殆ド每常訴フル所ノ初期ヨリノ徵候ナリ

本病ノ死亡率ハ從來ノ報告ニ徵スルニ二〇—八〇%ナリ就中熱ノ繼續及脈ノ極メテ頻數ナルカ但シハ甚シク緩徐
ニシテ六〇乃至以下ナルカ無尿ノ永ク持續スル場合及殊ニ必要ナルハ嘔吐ノ性質等ハ最モ豫後ニ關係ヲ有スルモノ
ニシテ黑色嘔吐ノ如キハ最モ危險ノ徵候ナリ

診斷

惡寒發熱嚙下痛(咀嚼痛?)黃疸灰黑色下利嘔吐殊ニ重症ニシテ黑色嘔吐ヲ發スル如キ場合ハ診斷容易ナリ本症ト

區別スベキハ左ノ諸症ナリ

一、加答兒性黃疸 一般症狀輕症ニシテ消化機ノ症狀ノ消退スレバ速ニ治療ス

二、「マラリヤ」 本病ニハ特異ナル熱型アリ「キニーネ」ニヨリヨク奏效ス其外血中ニ病原體ヲ認ム

三、「 Dengue 」 特異ナル發疹「ロイマチス」様疼痛其他一般ニ本病ハ黃熱ノ如ク重態ノ少ナキ等ニヨリ區別ス

四、黑尿熱 本病ハ「マラリヤ」ノ既往症黒色尿ヲ有ス從テ流行地ニ於テハ「アノフェーレス」蚊ノ棲息ヲ認ムルモ

黃熱ハ「ステゴミア」「カロープス」ノ棲息スル地ニ發ス

其外蛋白尿心窩部殊ニ肝臟部苦悶「フエジエット」徵候ヲ呈シ特異ナル嘔吐及其性質ニヨリ診斷ス

治療法

豫防法トシテハ蚊ニ對スル施設及一般の攝生法ニシテ未ダ確實ナルモノナシ

治療法トシテ確實ナル報告ヲ知ラズ元來本病ハ「ステゴミア」ニヨリテ病原體ヲ注入セラレテ發來スル一種ノ中毒徵候ト認ムベキモノナルニヨリ毒物ヲ體外ニ排除スルヲ以テ治療ノ主眼トスルノミ汗液腎及腸ヨリ諸種ノ對症の處置ヲ施スヲ得余ハ最近一週間無尿ヲ訴フル一患者ニ於テ利尿劑ニ加フルニ食鹽水ノ皮下注射ニヨリ奏效シタル例ヲ有ス少クトモ本病病理及治療法ハ多クノ將來ヲ有スルモノナリ

例一

患者 山崎某 二十一年

初診 大正八年四月二十一日

既往症及血族關係

兩親健在同胞七人内四人健存他ノ三人ノ内一弟ハ不明ノ疾病一妹ハ十年前

前四歳ニテ胃腸病ニテ末弟ハ八年前二歳ニテ熱病ニタチレタリ

患者ハ大分縣人ニシテ同地方ニ特殊ナル地方病アルヲ聞カズ小學校時代

ニ二回咯血シテ地方醫ニヨリ氣管支炎ノ診斷ヲ受ケシコトアルモ其後別ニ

田丸—黃熱ニ就テ(豫報)

著明ノ變化ナク昨年晩秋當南洋ニ渡來シ一時不明ノ原因ニテ兩睾丸ノ腫脹セシコトアルモ現今異常ナシ

本月十八日夜本島オオンサツノ附近海岸ニ於テ裸體ニテ友人ト共ニ一睡セシニ突然驟雨ニ遭ヒ夜間ヲ約一里弱徒歩ニテ宿舍ニ歸リシガ翌十九日ハ全身ノ倦怠惡寒ヲ覺エ次テ同日午後二至リ發熱シテ倦怠甚シク咀嚼痛(喉下痛トシテ來ル)腰痛食慾減退トナリ昨二十日ニ至リテハ身體ノ自由ヲ失フニ至レリ今朝來熱ハ大ニ下降セシ感アルモ全身衰弱甚シク極度ノ倦怠嚔下困難心窩痛嘔氣下利尿量ノ減少等アリ由テ診チ乞フト

田丸—黃熱ニ就テ(豫報)

現症

溫體三七・四分、脈搏一二〇至

顔貌苦悶狀ヲ呈シ眼珠結膜ハ輕度ノ黃色ヲ示シ口ノ開閉ニ疼痛ヲ訴フ胸部ニ異常ヲ見ズ腹部殊ニ肝臟部ハ過敏ニシテ強ク壓迫スルヲ許サス其他下腹部モ一般ニ過敏ナリ四肢ニ他覺的異常ヲ認メズ一般的重態ナルヲ以テ直チニ入院セシム

經過

二十二日 無尿下利殊ニ灰黑色ニシテ惡臭アリ眼珠ヲ始メ全身著明ニ黃色ニ著色ス肝臟部甚ク過敏ナリ

二十四日 黃色益著明、無尿、便ハ依然灰黑色下利便ニシテ特異ナル臭氣アリ嘔氣嘔吐頻發シ時々譫語ヲ發シ脈性不良ニシテ危險ヲ想ハシム

食鹽水(〇・八五%)六〇〇〇左大腿皮下注射(一回)

檢便 十二指腸蟲卵脂肪便

二十五日 黃色皮膚搔痒皮下溢血無尿依然タリ

食鹽水六〇〇〇右大腿皮下注射(二回)

夜ニ入り右肘靜脈ヨリ血液ヲ採取シテ檢鏡セシモ血球ノ變化其他寄生體等ヲ見ズ(第一回)

二十六日 黃色ハ著明ナルモ皮下溢血ハ各所ニ於テ吸收ヲ始ム尿ハ朝來利尿ヲ催ホシ約一週間無尿ナリシモ始メテ稍良好ノ徵アリ

檢尿 反應弱「アルカリ」性、比重一〇一二、蛋白著明ニ發現、膽汁色素

著明

食鹽水七〇〇〇左下腹部皮下注射(三回)

二十七日 嘔氣嘔吐アリ後又喀血アリ暗黑色粘稠ノ血塊ナリ
檢鏡 肺「ガストマ」卵多數

夜ニ入り右耳輪ヨリ血液ヲ採取シ鏡檢セシモ血球其他異常ヲ認メス(第二回)

利尿續テ良好

二十八日 昨夜來睡眠多ク朝來頻リニ眠ル

食鹽水九〇〇〇左大腿皮下注射(四回)

二十九日 暗紅色粘稠喀血、肝臟部壓痛大ニ去ル

檢鏡 肺「ガストマ」卵ヲ見ルコト前同ノ如シ

三十日 一般狀態ハ佳良ニ向ヒシモ耳下腺腫脹シ疼痛アリ口ノ開閉困難ナリ

五月二日 皮膚ノ黃色稍減退、食慾大ニ増進ス

五日 耳下腺化膿セシヲ以テ切開

二十七日 爾來一般的徵候モ佳良トナリ耳下腺ノ創面モ殆ド治シ全治ノ期目睫ノ間ニアリ

期目睫ノ間ニアリ

例二

患者 都正五(鮮人) 二十一年

初診 大正八年四月十七日

即時入院シ四月二十七日全治退院

例三

患者 鄭光質(鮮人) 二十年

初診 大正八年四月二十二日(發病後四日)

即時入院シ同四月二十九日全治退院

例四

患者 崔光吉(鮮人) 二十一年

初診 大正八年五月三日

即時入院シ同五月十二日全治退院

尙ホ此ノ稿ヲ終ハルニアタリ余ノ赴任以前當地ニ於テ邦人栗田某(大正七年八月末發病同九月十日死亡)及安達某(大正七年九月下旬發病十月七日死亡)ノ症狀ヲ當時看護ノ勞ヲ取リタル藤宮某工藤某及其他民政署管氏等多クノ實見談ニ徴スルモ所謂「クサイ」熱ト稱シ何レモ高熱嘔下痛(咀嚼痛乎)黃疸無尿下利嘔吐殊ニ暗紅色乃至血性嘔吐殊ニ特異ナル黑色嘔吐ヲ發シ二週間前後ノ經過ニヨリ死ノ轉歸ヲ取リシモノナリ

前記鮮人第二乃至第四例ハ共ニ輕症ニシテ第一例ノ山崎ノ症狀ヲ短縮シタルモノナリ

山崎某ハ初メ不明ノ疾病トシテ收容シ漸次各種ノ症狀ノ判明スルト共ニ病室其他ニ於テ時ニ捕獲シタル「ステゴミヤ」屬ノ蚊ノ存在スルコト等ニヨリ黃熱ナルヲ思ヒ余ノ寡聞多クノ參考報告ヲ有セズ熱帶病的經驗ヲ有セズ唯一ノ最近入手シタル隈川氏ノ熱帶病學ヲ參考シ茲ニ公衆衛生殊ニ新領土ニ於ケル邦人ニ對シ攝生ヲ注意スルト同時ニ大方先輩諸氏ノ批評教示ヲ乞フ所以ナリ

此報告ヲ終ハルニアタリ恩師桂田博士ノ御懇篤ナル檢閲御指導ヲ感謝ス

【斷り】 本稿ニハ別ニ第一例山崎患者ノ體温及脉搏ノ經過ニ關スル附圖一枚アリシモ印刷ノ都合上之ヲ略セリ。著者及讀者ノ諒恕ヲ乞フ (編者)